



「現代的意義」を問う視点

満井秀城(みつい しゅうじょう)

先般、筆者は「現生正定聚げんしょうしょうじょうじゅの現代的意義」という課題について考える機会を与えられ、その折に申し上げたこと、また感じたことなどを振り返って、あらためて少し提言を申し述べたい。

「現代的意義」を問う時、私たちは、どうしても、今の時代に照らして考えようとするが、先ずもって考えておかねばならないのは、宗祖の時代の「当代的意義」こそが、今の私たちの「現代的意義」の原点ではないかということである。

正定聚について言えば、此土入聖しどにっしょうの法門は別の論理として、浄土願生じょうどがんしょうの浄土門では、浄土での正定聚が常識であり、煩惱具足ぼんのうぐそくのままでの正定聚は、正定聚の定義からしてありえない矛盾的概念というほかない。現生正定聚と言いつけられた宗祖の卓越した到達点の意味の大きさを知ることこそが、「現代的意義」を問う出発点であろうと思う。

正定聚じやじょうじゅ・邪定聚ふじょうじゅ・不定聚さんじょうじゅの三定聚さんじゅ(または三聚)は、部派(いわゆる小乗)、大乘を問わず、あらゆる仏教の共通概念である。その内容については、細かくは一様でなく、それぞれ独特の概念規定がなされ、一言で言うのは難しいが、基本構造は次のように言える。すなわち正定聚とは、正しい方向に向かい、さとりに至ることが決定けつじょうしている人たち。邪定聚とは、邪よこしまな道を進み、邪悪な果報が定まっている人たち。不定聚とは、どちらともまだ決定していない未定の人たち。つまり、善・悪・無記の意味合いに近いと言ってよいだろう。基本的には、この構造に沿って細かな内容規定や、その位相について諸説がなされた。宗祖はこの三定聚を、右の通説とは異なり、第十八願・第十九願・第二十願の三願に配当された。これは、本願に真しん・仮けを見抜いた宗祖ならではの極めて特異な概念規定である。

第十九願がなぜ邪定聚なのかというと、念仏一行いちぎょうに対し、諸行じやぞうという邪雑ぎょうな行に心が定まっているからで、第二十願は、念仏一行あに立ち、遇っている法義は正しいのに、自力の思いが残つ

ている。この自力の心を離れば正定聚に入るが、かえって自力を募り諸行に思いを寄せると邪定聚に転落する。そういう意味で、どちらにもなりうるから不定聚という。

およそ右のように言えるかと思うが、宗祖は何故に、こういう理解に到達されたかを考えてみると、本願に真仮を見抜き、十八・十九・二十の三願を生因の三願と見られ、その必然として因に三種あれば果に三種あり、それが難思議往生・双樹林下往生・難思往生の三往生で、同様に機にも三類型あるはずで、それが正定聚の機・邪定聚の機・不定聚の機ということになる。こうして見ると、宗祖は、本願を基軸にすることで、あらゆる法義を仕分けして行かれたことが伺われる。凡夫の物差しでなく、如来の論理、阿弥陀仏の本願を座標軸にしていかれたのである。善導大師が「順彼仏願故」と言われたのは、「彼の仏の願」＝阿弥陀仏の本願にしたがっているかどうかを問題にしたのであって、法然聖人が念仏の法義に眼を開かれたのも、この善導大師のお言葉による。念仏ひとつでどうしてさとりを開くことができるのか、そういう心配は凡夫の論理に他ならない。甚だ不遜な言い方だが、天台大師も撰論学派の人も、やすかろう悪かろうの凡夫の論理ということになるだろう。如来の世界のことを凡夫の論理で計るのは全く無意味である。仏様のことは仏様の論理で見るとべきだ。これが正しい方法論であり、本願を基軸とする姿勢に徹した宗祖ならばこそ、三定聚を生因三願と合わせてみる独自の論理に巡りつかれたのである。

そして正定聚を現生に取りきられたのもまた、宗祖の透徹した炯眼である。それまで浄土での正定聚が常識であった中で、おそらくその論理的矛盾に気付かれたのだろう。すなわち彼土正定聚なら、私たちは浄土へ行って菩薩の修行をし、それで初めてさとりを得ることができることになる。曾無一善の私たちは、阿弥陀仏の本願独用によってのみ仏果を得るのだから、浄土へ行って菩薩の修行をするという、自分の仕事があるのはおかしいではないか。しかし多くの聖教には、何れも彼土正定聚とある。それを、この疑問の上に立って聖教を博綜された結果、唐訳大経『如来会』の第十一願成就文に行きつかれ、現生正定聚の文証とされたのは周知のことと思う。

「現代的意義」を問うには、先ず宗祖の「当代的意義」から出発すべきであり、そのことによって本願を座標軸とする基本原理が見えてきたのだが、その上でなお、正定聚やさとりが、現代にどう意味を持つのかも等閑視できない。日頃現代人は、死後のさとりなど無関心で、目先の即物的

利益のみを追い求めている。そういう人たちに、正定聚^{めつど}や滅度^{めつど}という語がどう響くのか。これは確かに大きな課題と言ってよい。

私の思いで言えば、例えば、現代人が追い求めようとしているものの一つに「自由」があり、その「自由」とは、自分の思い通りになることだと考えている。しかし、よく考えてみると、自分の思い通りになるとは、実は、欲望という煩惱に支配されている不自由な姿なのである。真の自由とは、この煩惱^{げぼく}の繫縛^{けいばく}からの解放に他ならないのであって、そこに仏道を歩む意味がある。更には、日頃追い求めているものは果たして畢竟依^{ひつきょうえ}と言えるものだろうか。こういう価値観の転換を伝えていくことが必要ではなかろうか。

「現代的意義」を提供することを急ぐあまり、時代風潮や時代のニーズに合わせるのには、私はむしろ慎重でありたい。無論何もしないでよいというのではない。しかし時代に振り回されるより、ぶれない確かさこそが信頼性なのだと思うのである。親鸞聖人も蓮如上人も、ともに乱世の中であって、世の中が乱れ仏教徒として何をすべきなのか、その現実的課題に直面し、戒律を厳格に守る戒律復興運動が高まっていく時代の流れであって、あくまで悪人正機^{あくにんしょうき}の他力道^{たりきどう}を歩まれたのである。本願を自身の基軸とし立脚点とされた、その姿勢こそが、本当の「現実的」対応ではないかと思う。

ご法義の危機^{さけ}が叫ばれて久しく、待ったなしの喫緊^{きつきん}の課題であることは言うを俟たない。ただ、まだ幸いに儀礼が残っている。葬式仏教・形式儀礼と揶揄^{やゆ}されようが、お通夜などの法要には社会的付き合いで普段寺に参らない人たちも参列する。その時こそ真実を伝える仏縁なのだ。真実に出会えば、人は必ずそれに突き動かされていく。美しい音楽や美術作品には必ず心が動かされるように。来る宗祖七百五十回大遠忌法要^{きただいおんき}も、そういう勝縁^{しょうえん}にしたいものである。

(司 教)